



MINATO-TOKYO

みなとユネスコ 会報

Bulletin

MINATO UNESCO ASSOCIATION NEWS & CALENDAR

ISSUED BY/MINATO UNESCO ASSN. 16-3,SHIMBASHI 3-CHOME MINATO-KU TOKYO 105-0004/HIROSHI NAGANO PRES.
発行所/港ユネスコ協会 〒105-0004 東京都港区新橋3-16-3 Tel: 03-3434-2300 Fax: 03-3434-2233 発行人/永野博
Mail: info@minatounesco.jp http://minato-unesco.jp

2019年9月1日発行 第157号

目次

P1 巻頭言：政治の動きに惑わされずに	P7 チュニジア共和国エルーミ大使を訪問
P2 新入会員を囲む会	P8 ゆかた着付け体験教室
P3 都立三田高校・ユネスコ委員会の来訪	P9 モンゴルの家庭料理
P4-6 国際理解講演会「縄文の美を楽しむ」	P10-11 中華人民共和国駐日本国大使館訪問
P6 茶の湯入門講座	P12 事務局便り

政治の動きに惑わされずにユネスコ精神を語り継いでいこう

港ユネスコ協会会長 永野 博



現在、日韓関係が悪化しているが、韓国のユネスコ協会連盟の代表は毎年、日本ユネスコ協会連盟の全国大会に出席されている。これまでも日韓関係は良くなったり、悪くなったりという波を繰り返している。それぞれの国民一人一人の考えが突然、正反対に転換することはないので、結局、政治の波に国民感情が影響を受けていることになる。過去の歴史映像をみていると、昔はこんなことが異常にエスカレートして戦争になったのかもしれないが、現在は、それなりの抑止力が働いているだけでも幸せである。しかし世界をみると局地的な戦争は続いているし、アジアでも不安の種には事欠かない。

第二次世界大戦の終結を機に誕生したユネスコは、教育、科学、文化を通じて世界の平和が達成されることを願って創設された。我が国では戦後の平和を希求する人々に熱狂的に歓迎されたが、世界の平和が長続きするに伴い、ユネスコを口にする人も少なくなった。しかし、歴史は繰り返される。そこで求められることが、個々人が思考の根底にしっかりした価値観を有することである。そうでないと、私たちは扇動的な動きに流され、価値観の原点がどこにあるのかを忘れかねない。「戦争は人の心の中で生まれるものであるから、人の心の中に平和のとりでを築かなければならない」という、一人一人がしっかりと心の中に持ち続けなければいけない理念がその存在感をこれから増してくるのは疑いない。幸い、ユネスコ運動は我が国の近隣諸国でも盛んであり、日中韓の共同事業も政治の波があっても継続していることは素晴らしい。

わが国をめぐる国際環境は戦後、平穏な時期が長い間続いてきた。このため平和を希求するユネスコ精神も、高齢者のお守りようになってしまった感も否めない。この理念をどう若い世代につないでいくのが現下の最大の課題である。戦争直後のように、メディアが揃ってユネスコ、ユネスコと声高に宣伝してくれることもないので、地域ユネスコ協会がその真価を発揮すべき時期がきている。港ユネスコ協会でも都立三田高校ユネスコ委員会、慶應義塾大学・ユネスコクラブ、玉川大学ユネスコクラブ、東京海洋大学との連携を一部、始めている。できるだけ、若い方々にユネスコ運動の存在を知ってもらい、このような地道な活動が、長い目で見て世界の平和につながることを期待している。

「2019年度 新入会員を囲む会」 活動内容の説明と懇親会

日時：2019年6月14日（金）18：45～

場所：港区立生涯学習センター305室および MUA 事務局

今年は11名という大勢の新入会員に参加いただき後半の懇親会まで大いに盛り上がりました。永野博会長、菊地賢介副会長の歓迎の言葉、津野久志新事務局長の挨拶、そして秋山雅代常任理事からの新入会員ご紹介・皆さまの自己紹介と進め、オリエンテーションを開催。



港ユネスコ協会のイベント活動、公の行事への参加と多彩な行動の計画の中、企画、運営スタッフの増員を願う気持ちを込め7つの委員会からスライドを使って活動概要の説明、今年の活動抱負とお話にも熱がこもりました。

この一年の活動で、特筆することは、「ユース委員会」を峰尾茂克理事のアドバイスの下で再発足させたことです。永野会長、平方副会長の音頭で慶応義塾大学・ユネスコクラブ（筒井真子・6期代表）、東京海洋大学水圏環境教育学研究室（佐々木剛・海洋政策文化学部門教授）との協働で新たなスタートを切りました。

今年からは、「平和を考える」をメインテーマとしたシンポジウムを毎年開くことを、横井彩会員（国連大学サステイナビリティ高等研究所事務総括）を中心に企画を考えています。この他、日本語スピーチコンテストは3回目の開催を目標、座禅体験講座や日本各地の民謡と民話を紹介する参加型イベントの開催、ユネスコスクールとの関係では、都立三田高校との「ユネスコ活動と戦争と平和を考える会」の継続、東京都ユネスコ連絡協議会、日本ユネスコ協会連盟への積極的な参加等のお話をバックボーンにしながらいは進みました。



最後に事務局内にて歓談。あっという間の2時間15分で楽しく和気藹々の懇親会となりました。この度の出席の方々、やむを得ず参加できなかった皆さま、そして迎えた我々を含め、今年一年が実り多い年となるよう祈念して閉会となりました。

（会員開発委員会担当 常任理事 小林 敬幸）

都立三田高等学校・ユネスコ委員会の来訪 ～ユネスコ活動および戦争と平和について考える～

日時：2019年6月20日（木）16：00～17：15
会場：港区立生涯学習センター桜田記念室

恒例となりましたが、三田高校ユネスコ委員会の生徒さんによる当協会訪問が、今年は6月20日に実現しました。今年は8回目となり、当日は総勢25名が鈴木民子先生に引率されて来訪してくれました。最初に永野博会長より、ユネスコ憲章の中にある「戦争は人の心の中で生まれるものであるから、人の心の中に平和のとりでを築かなければならない」という言葉を引用し、ユネスコ活動の意義と日本における民間ユネスコ運動の紹介がありました。引き続き、清水軍治理事が講師として、ご自身の戦争体験を生々しい場面も含め1時間近く講話されました。その間、生徒さんは熱心に聞き入っておりました。また、体験談に加えご自身によるアコーディオン演奏に合わせて、当時盛んに歌われていたいわゆる軍歌も披露し、当時戦時中であって国民の士気を鼓舞する目的があったこと、当時の人々がどのような気持ちで歌っていたかも紹介してくれました。

後日、鈴木民子先生から、生徒さんが書かれた感想文をお送り頂きました。今年は、鈴木先生のご判断で、感想文を寄せてくれた生徒全員の感想文をお送り頂きました。その中には、要約すると、「戦争の貴重な生の話が聞けて悲惨さが理解できた」、「疎開生活が必ずしも安全ではなくそこでも危険と隣り合わせであったことに驚いた」、「今の平和の有難みと大切さが解った」、「戦争を二度と起こしてはならないということは次の世代にも引き継いで行きたい」、「自分もユネスコ委員として懸命に取り組みたい」、「87歳の清水さんの元気なアコーディオン演奏と歌に感銘した」との感想が多く、感受性の高い真摯で貴重な意見が書かれております。読者の中にも、感想文を一読されることを希望される方々がおられると思いますので、いつでも閲覧できるように事務局にてファイルし常備しておきます。



(中央左から、清水軍治理事、鈴木民子先生、永野博会長)

(事務局：津野久志)

東京都ユネスコ連絡協議会より

◎都ユ連 ESD 研究会 公開講座「国際社会におけるSDGsと科学技術」

8月3日（土）13：30～16：00 新宿区男女共同参画センターにてMUA会長・永野博氏（研究開発法人科学技術振興機構研究主幹）による基調講演、科学技術と社会変革、科学技術イノベーションあつてのSDGsという内容で代表・宮崎冴子氏の下で開催されました。

◎都ユ連研修会「2019全国大会 in 東京 ◇ 勉強会」 2月11日（月／祝）午後1時～5時

目黒区総合庁舎にて川上千春氏（日ユ事務局長）基調講演及び討論会が開催され、MUAより平方、小林、宮下、奥村、笠原、佐藤の7名が参加。9月の全国大会に向け盛り上がりました。

「縄文の美を楽しむ」

日時：6月21日（金）18：30～20：30

会場：港区生涯学習センター305号室



今回の講演会では講師に、東京国立博物館 学芸研究部調査研究課 考古室の品川欣也（しながわ・よしや）室長をお招きして、2018年7月に東京国立博物館で開催された特別展「縄文—一万年の美の鼓動」にそって、以下のとおり縄文の造形美の楽しみ方をお話し頂いた。

最近、縄文に注目する人が増えている。この特別展「縄文」には会期中に35万人を超える来場者があり、関心の高さが感じられた。近代の日本考古学は東京の「大森貝塚」から始まった。アメリカの動物学者エドワード・S・モースが明治10年に来日。横浜から新橋へ向かう途中、大森貝塚を発見して発掘。このことから日本では考古学という言葉が生まれ、また日本の考古学は縄文から始まったともいえる。

○入門編……縄文の時代背景

- ・ 時間的な範囲：前1万1000年～前2400年までの一万年間
- ・ 空間的な範囲：北海道～沖縄本島、時期によって範囲の収縮が見られる。
- ・ 時期の区分：草創期・早期・前期・中期・後期・晩期の6区分
- ・ 自然環境：草創期は晩氷期で寒かった。早期以降、温暖で湿潤な後氷期。前期には現在の環境と基本的に同じになり、日本列島の景観と四季が整う。
- ・ 動物：大形のもの（マンモス、ナウマンゾウ、オオツノジカなど）が減少し、中小形（シカ、イノシシなど）がみられるようになる。
- ・ 植物：それまでの針葉樹林から、堅果類（栗、胡桃など）や豊かな落葉広葉樹林が広がっていった。

縄文の定義①

- ・ 経済区分は獲得経済（狩猟・漁撈・植物採集・植物栽培）。弥生時代は生産経済（稲作農耕＋狩猟・漁撈・植物採集）。
- ・ 居住形態（住まい方）は定住生活。

縄文の定義②

- ・ 土器の発明：早期以降は煮炊きに加えて、堅果類のあく抜きが目的。粘土が、焼くことで硬くなる、火に強くなる、水を通さない等の化学的変化に気づく。
- ・ 弓矢の発明：中小形獣が増え、俊敏で動きの速い動物や遠くにいる動物を狩猟できるようになる。
- ・ 漁撈の活発化：温暖化によって入り江や湾が生じ、漁も盛んになる。

以上のように、遊動生活をしてきた旧石器時代とくらべると、環境の変化により、経済や生活形態が変わり、生活の道具や家財が増えていった。

第1章 暮らしの美

当時の人々の日々の暮らしを支えるために作られた道具。

- ・ 引き算型造形：代表が石器（尖頭器、石斧）、骨角器、木器など。自然にある物の素材や特徴をいかして打ち割ったり、削ったりして作る。釣り針などは、金属で作られた現代のものとはほとんど変わらない形。機能美を備える。
- ・ 足し算型造形：粘土で作られた土器が代表。思い通りに形づくられる。（例：微隆起線文土器、青森六ヶ所村出土、草創期）文様に強い思い入れがあるのが縄文土器の特徴で、草創期の頃から土器作りは上手であった。＊以降（ ）内の地名は出土場所を示す。
- ・ 漆製品：早期から登場。漆を塗ることで耐水、耐久、装飾性が増す。また接着剤としても用いられる。
- ・ 飾り
- ・ 装う

色について：縄文時代の人々にとって特別な3色は赤、黒、緑。それぞれ大切な物、特別と思われる物に塗られている。

- 土偶からわかるファッション（例：みみずく土偶、さいたま市、後期、赤色）：
頭には髪飾りを、また耳には耳飾り（ピアス）をつけていた。
- 人生の節目に耳飾り（例：東京調布市、径9.8 cm、75 g、晩期、赤色）：
サイズはかなり大きい。壮年女性用か。耳飾りの大きさや文様は人生の節目（成人、未婚・既婚、経産婦・非経産婦）や出身を表し、所属に応じた責任を示しているのではないか。
- 憧れの貝輪（例：貝で作られたブレスレット、千葉船橋市、後期）：
貝の取れない地域では粘土で作って代用するなど貝輪への憧れがみられる。
- 動物への憧れや畏怖を身に着ける（例：猪牙・サメ歯製垂飾、宮城石巻市）：
動物のもつ強さ、賢さ、生命力を身に着けることによって自分の強さを示したかったようである。

第2章 美のうねり

縄文土器の造形美はおよそ1万年の間、絶え間なく変化をくりかえした。

- 埋めつくす美（草創期・早期・前期）（例：関山式土器、千葉松戸市）：
多縄文土器。縄や竹などの道具によって生じた痕跡を装飾として楽しんだ。
- 貼りつける美（中期）（例：火焰型土器、新潟十日町市）：
火焰型、王冠型、水煙型とよばれる土器。粘土を幾重にも貼りつけ、力強い装飾性にあふれている。
- 描き出す美（後期・晩期）（例：大洞式土器、青森八戸市）：
土器に線を描いたり、縄文をつけた後を磨り消したりして、デザインを引き立たせる。

その他にも器の種類の変化から、食生活や使用される場面（行事など）が変わっていったことなどが読み取れる。



火焰型土器

縄文の造形のルールとして注目することは「集団の個性」：

作家「個人の個性」が存在しない時代であった。個人ではなく、周りの皆の了承のもとに作られた。みな同じ形、同じ文様の造形を作ることによって、集団としての一体感や結束を高めた。

第3章 美の競演 ―世界の各地と比べてみる

縄文中期にあたる時期のユーラシアの各地では、すでに農耕や牧畜が行われ、都市、国家が形成され、金属器の生産も始まっていた。

- 黄土高原（中国）（例：彩陶鉢、彩陶短頸壺）：シンプルな器形に幾何学文様。
- インダス川周辺（例：彩文浅鉢、彩文壺）：シンプルな器形に動植物や幾何学文様。
- エジプト（例：磨研鉢、刻文入壺）：土器は簡素で実用的、権威を示すのは金属製品や貴石。

縄文時代は安定した定住生活が長く続き、美を作る余裕があった。また、海外との交流がまれな時代であったから、日本だけにみられる独創的な縄文土器の造形美が生まれた。

第4章 縄文美の最たるもの

国宝に指定されているものは下記のわずか6件：

（1995年）縄文のビーナス、（1999年）火焰型土器、（2008年）中空土偶、（2009年）合掌偶、（2012年）縄文の女神、および（2014年）仮面の女神。

国宝として評価されたのはごく最近。先の特別展「縄文」では、これら6件すべてが展示された。

第5章 祈りの美、祈りの形

土偶は安産、多産など子孫繁栄、豊穡のために作られたと考えられている。

- 土偶：最初の頃のもの、3.1 cmの女性像（滋賀近江市、草創期）、最後の頃は34.2 cmの遮光器土偶（青森つがる市、晩期）、大きさや形が変化し、祭りに参加する人数もあり方も変化。
- 土面：仮面、祭りのお面やデスマスクと思われるもの。
- 人の形をあしらった土器：深鉢形土器（長野富士見町、中期）は、口縁部から胴部に器を抱えたかのような人の姿（背中）を表現する、豊穡を願うために作られたと解釈されている。人形装飾付有

孔鏢付土器（山梨アルプス市、中期）は、片手を挙げた人物が表現され、当時の何かしら合図やしぐさを表したと解釈されている。

- ・動物の造形：最も多く作られたのがイノシシ。多産の祈り、強さへの憧れをこめていると考えられている。
- ・人と動物の理想的な関係：狩猟文土器（青森八戸市、後期）には狩猟の場面がみられる。犬形土製品（栃木栃木市、晩期）は猟犬として活躍。
- ・親子の愛のかたち：

その①顔面把手付深鉢形土器（山梨北杜市、中期）、口縁部に土偶のような顔が付き、膨らんだ胴部にも顔がみえる。土器全体を母体と見立て、出産文土器と呼ばれている。子をあやすしぐさの土偶もある。

その②手形・足形付土製品（青森六ヶ所村、後期）、子どもの手のひら、足の裏を押し当てて形を写し取った土版。

現代に比べると死産や乳幼児の死亡率ははるかに高かったとされる。親子の強い結びつきや、無事な成長の願い、祈りが感じられる。



遮光器土偶

第6章 新たにつむがれる美

考古学の研究対象ではなく、芸術として「縄文」の魅力を見出し、愛した作家や芸術家たち。「縄文」との出会いから、それぞれの新たな美を生み出していった。

○番外編……見るポイント

土偶、土器たちはシャイで、向こうから語ってくれない。なによりも博物館や遺跡に出かけ、たくさんの土器や土偶と出会って、好きになってほしい。

参考：東京国立博物館（平成館考古展示室、本館1室 日本美術のあけぼの）

港区立郷土博物館、品川区品川歴史館（大森貝塚）

（学術文化委員会 磯部豊子）

茶の湯入門講座

開催月日：5月27日（月）、6月24日（月）および
7月22日（月）各回18時～20時

会場：港区生涯学習センター 203号室

「気楽にお抹茶をいただきましょう」をキャッチフレーズに掲げ、ひと月1回のペースで3回開催されるコースです。講師は小野 宗恵先生（裏千家 専任講師）にお願いしており、参加費は6000円（2000円×3回分）です。

習得内容：

お抹茶のいただき方、茶道具の扱い、お抹茶のたて方などです。

ひとこと：

日本の伝統を学びたい、あるいは海外のかたと共有したいというニーズの高まりに応えるべく企画された、気楽に学べる講座です。2018年6月にスタートしましたが、次回からは参加費を千円割引する会員価格を設定いたします。これを機会に会員の方にもご参加いただけたらと願っております。

（副会長 平方一代）



チュニジア共和国モハメッド・エルーミ大使を訪問

月日：2019年7月9日(火)

場所：千代田区九段南

チュニジア共和国大使館を菊地、奥村、平方、宮下各副会長ともども訪問した。これはモハメッド・エルーミ大使からの、同国としてユネスコ活動で何か協力できることはないだろうかという問い合わせにこたえるための訪問であった。先方からは、モハメド・トゥカブリー一等書記官が同席された。



エルーミ大使からは、チュニジアはフランス語文化圏の国でもあり欧州各国との交流は多く、リゾート地としても知られていること、ローマに滅ぼされた都市国家カルタゴ以来の歴史遺産が豊かで、特に首都チュニスにあるバルド国立博物館の展示が素晴らしいこと、また、2015年には同博物館の前でイスラム過激派によるテロがあり日本人も犠牲になったが治安は既に回復していて、日本から多くの観光客に来てほしいなどの話があった。

当協会側からは、現在行っている各種活動を紹介する中で、以前、チュニジア大使館の関係者の方に料理教室の講師を引き受けていただいたことがあること、その後、その方との親交を深め帰国時には歓送会を行ったことがあることなど、チュニジア大使館と港ユネスコ協会の間でこれまで交流があったことを紹介し、和やかな雰囲気意見交換を行うことができた。

私自身も偶然ではあるが、2014年、エルーミ大使の前回の東京での在任時に国際的な財団主催の会合でお会いしたことがあること、また、さらにさかのぼると2004年には当時のハンナシ大使と二国間交流の推進方策について意見交換したことがあることなどをお話した。チュニジア共和国について、2004年当時に私が聞いた話の中で驚いたこととして記憶していることは、チュニジアの大学では男子学生より女子学生の方が多く、50%以上が女性であること、また、これは当時、筑波大学の研究者で北アフリカ、特にチュニジアを専門にしている方から聞いた話では、サハラ砂漠は一面の砂で生物などほとんどいないように見えるが、実際は砂の下にいろいろな生物がいて、生物多様性に富んでいるということであった。二つの話とも私の平凡な想像を超えるものであったのか、よく記憶に残っている。

訪問の最後では、それでは今後どのような協力ができるのであろうかという話になった。当方からは、まず料理教室の講師をお願いできたらということと、講演会の講師を派遣していただくことなどが可能ではないかと提案した。一方、チュニジア大使館側からは、チュニジアを紹介する大画面の写真などが沢山あるので、これらを使ってチュニジアを紹介する場所や機会がないだろうかという話があった。これらをどう進めていくかは今後の課題であるが、今回このような機会がチュニジア大使館との間でできたので、料理教室を手始めにできることから協力を実現していきたいと考えている。



(中央：エルーミ大使、右端：トゥカブリー一等書記官)

(MUA 会長 永野 博)

ゆかた着付け体験教室

日時:2019年6月29日(土) 13:30~16:00

会場:港区生涯学習センター203号室

今回も外国のかたが参加者の半数以上を占めました。ゆかたの着付けを通して日本文化を紹介することができ、外国人と日本人の交流がすすむことを嬉しく思います。

☆習得内容:

- ①ゆかたの歴史
- ②講師によるゆかた着付けデモンストレーション
- ③各自で着付けの練習
- ④ゆかた姿で記念撮影
- ⑤ゆかた姿で自己紹介と懇親会
- ⑥脱いだゆかたをたたむ練習



☆参加者の感想:

- 母に勧められて参加して良かった。(親娘でのご参加)
- 大学生の娘に着せてあげたくて参加しました。
- 海外のかたの方が日本人よりも沢山着付けを習っているのが不思議です。
- 貸衣装屋さんで着せてもらった事がありますが、自分で着たのは初めて。自分で着ることができて良かった。(外国人)
- ゆかた大好き。(外国人)
- 自分で着るのは良かった。有意義でした。(外国人)

☆ひとこと

夏の風物詩ゆかたは、和装の中では日本人に最も広く受け入れられており、若い世代の方に人気があります。

海外からの観光客の中には、日本文化を体験する方法として、外国人でも簡単に着られるゆかたを購入したり、少額で借りることができるレンタルゆかたを利用する方が増えています。

ゆかたを着た姿をインターネットの世界に公表する男女が増え、人気が出てきたようです。



(副会長 平方一代)

世界の味文化紹介 モンゴルの家庭料理

日時：2019年7月20日（土）

会場：港区男女平等参画センター「リーブラ」

今回は、宇都宮ユネスコ協会およびいっくら国際交流会代表の長門芳子様のご紹介で、現在宇都宮大学大学院修士課程に在学中のモンゴル出身のシレンデブ・オユンエルデネさん（当日の愛称マヤ先生）とバトスヘ・ウヌビレグさん（ウノ先生）のお二人を講師としてお迎えしました。マヤ先生は、アジア諸国で土木の研究に取り組んでこられ、ボランティア経験も豊富で、そうした活動の中でモンゴルの文化紹介にも携わってこられたそうです。ウノ先生は「日本とモンゴルの国際協力 NGO 活動に関する比較研究」というテーマで論文を執筆中です。勉強以外では、在日モンゴル人の子どもたちに日本語を教える活動にも取り組まれているとのこと。お二人とも、両国の交流に意欲的で、日本語も大変お上手です。



ウノ先生(左)とマヤ先生



当日は、始めに、映像を中心としたモンゴル国の紹介がありました。ウノ先生は「コンバイノー（こんにちは）」との元気な第一声で挨拶をされ、その後は全て日本語で、モンゴル国の風土や歴史について紹介されました。モンゴルは草原地帯が多く、年間の寒暖差が大きいそうです。バトタッチしたマヤ先生からは、お祭りや子どもの遊びを通しての国民の活気ある暮らしぶりについて、実物の玩具等も用いながら、紹介して頂きました。

このように、モンゴル国についての情報を得たところで、いよいよ調理実習の開始です。モンゴル料理では肉（牛・羊）を多く使うそうですが、今回は牛肉を使用し、下記の料理に取り組みました。

♪当日のメニュー♪

1) ホーシュール

小麦粉を練った生地で、牛粗挽き肉とニンニク・玉葱のみじん切りを塩・胡椒で味付けした具を包み、二つ折りし、油で揚げたうえ、キムチを添えていただきます。（右下写真：後列中央）

2) ツイワン

麵料理です。小麦粉を練った生地を蒸し、冷めたところで、細く切ります。これに細切りした玉葱、牛肉、ジャガイモを加えて炒め、塩・胡椒で味付けし、仕上げに万能葱を散らします。（右下写真：前列中央）

3) モンゴルのサラダ（ニースレル）

茹でたジャガイモ・人参と胡瓜、厚切りハム（全て1cm角に切る）を用意。これに茹で卵を加えてマヨネーズで和え、イタリアンパセリを添えていただきます。（右下写真：前列左）



ホーシュールとツイワン用の生地は事前に先生方を中心に、委員もお手伝いして準備しました。手際よく用意された生地は、しなやかで、調理の工程でも扱いやすく、参加者からも好評でした。また、試食の時には、「日本の餃子や焼きそばと食感が違う。」「生地のお味を楽しめる。」等の声が聞こえてきました。食後は、スーテツアイという塩味のミルクティー（右写真：前列右）とモンゴルのお菓子（右写真：後列左と右）をいただきながら、先生方も交えて、各テーブルともに和やかな時間を過ごす一日となりました。

（世界の料理委員会 柳元美樹子）



中華人民共和国駐日本国大使館訪問

日時：2019年7月16日（火）午後2時から
場所：港区元麻布

港ユネスコ協会・永野博会長を代表とし、会員とその家族26名を含むグループで元麻布にある中華人民共和国駐日本国大使館を訪問。最初に政治部アタッシュの王晓瑩（ワン・シャオイン）様から、政治部公使参事官・倪健（ニー・ジェン）様および政治部一等書記官・邵宏偉（シャオ・ホンウェイ）様をご紹介いただきました。続いて港ユネスコ協会の小林より永野博会長を紹介、三方のご挨拶で友好を確認しました。倪参事官、邵一等書記官からは今日の中国につき下記のとおり貴重なお話を伺うことが出来ました。

政治部公使参事官・倪健（ニー・ジェン）様のご挨拶

今日の両国の関係につきメディアは、G20・大阪サミット等において安倍首相と習近平国家主席との度重なる会見を通じ、「既に正常に戻った」と伝えています。しかし国同士の友好関係の構築には国民、市民同士の交流が大切。今の中国人は何を考えているのかを知って頂き、その上で近隣同士仲良くしていかなければならないと思います。2千年以上の交流の中で、フェイス・トゥ・フェイスを心がけ、本日のような交流会を促進して、国と国との関係に先立って、港区民とのつながりを築いていくこうした場を歓迎します。

映画「春節」上映・全国各地の新年のお祝い、そこでの家族の団らん、龍の踊り等、様々な郷土のお祭り。明と清の時代の宮廷の舞楽から一般庶民へと広がり、豊作を祈り楽しんできた「吉祥と歓楽」、「鼓楽と舞踊」。春節の吉祥・平安・祝福・団欒、そして龍の踊りは民族文化の舞台でもあり、これが国家の発展につながっている。（30分程の映画を大画面で鑑賞）

政治部一等書記官・邵宏偉（シャオ・ホンウェイ）様のお話

「中国と日本は、一衣帯水の間柄」と長い年月の中、隣国同士の深いつながりがある、との前置きから今日の中華人民共和国をテーマに、スライドショーの形で、お話をお伺いしました。

★**行政区画**は23の省（陝西省・遼寧省・四川省ほか）、5自治区（内モンゴル・広西チワン・チベット・新疆ウイグル・寧夏回族）、4直轄市（北京・天津・上海・重慶）、2特別行政区（香港・マカオ）からなり、人口は14億人になろうとしている。世界総人口の18.6%を占め、日本の10倍。日本に長期滞在している中国の人は95万人、短期観光の人数は830万人に及んでいる。

★**悠久たる歴史と古代文明**・・・4千年前の夏王朝、3千年前の商では（鉄）、そして周では（青銅器）、2700年前は春秋戦国時代・・・秦・漢・三国・晋・隋・唐・宋・元・明・清・・・の長い歴史の中では、なじみの深い「兵馬俑」、「三国志」、「シルクロード」とつながる。2013年に「一帯一路経済構想」を打ち立てましたが、この構想は鑑真和尚とも縁のある「奈良」までを含んでいます。

四大発明・・・「活字印刷」「火薬」「羅針盤」および「紙」。

漢字は3千から4千もある表意文字。甲骨文字から始まり行書、草書、楷書と書体が多様化・・・日本に伝わって「草書」から平仮名、片仮名と変換されていった。

多民族国家・・・チベット族、モンゴル族、ウイグル族、白族、苗（みやお）族、朝鮮族、満州族など56の民族と言語からなっている。

演劇・・・「京劇」は無形文化遺産。独特のくまどりが有名。

切紙・・・無形文化遺産

楽器・・・琵琶、二胡、古箏、古琴、フルースなど。

★**年中行事**・・・**春節（旧正月）**餃子は主に揚子江を挟んで北の方、ワンタンは南で好まれている。
元宵節（旧暦の1/15）は、月見の日。団子と華やかな灯籠で祝う。**端午節（旧暦5/5）**には粽、**中秋節（旧暦8/15）**には丸い月餅がつきもの。

★**教育**・・・義務教育は、小学6年、初級中学3年の計9年間で23万カ所において1億4千万人が学んでいる。その後は高級中学、大学となる。大学は3万カ所で2600万人が学び、毎年750万人が卒業。

★**世界遺産**・・・文化遺産：37、自然遺産：14、複合遺産：4と合計55。「万里の長城」は攻める目的の施設ではなく、あくまでも防御用の建造物。ほか紫禁城（故宮）、雲崗石窟、蘇州古典園林、ラサの

ポタラ宮、新疆天山、九寨溝、四川ジャイアント・パンダ、雲南省の棚田群など。世界に誇る遺産の数！ぜひ観光でいらしてください、とご案内頂きました。

★**ユネスコ活動**・・・習近平国家主席夫人はユネスコ本部から「児童と婦人教育の特使」の称号を受け、世界レベルで活動している。1979年2月に教育部が中心となって全国委員会を立ち上げ、30部門の役所で推進している。2013年には中国の教育部副部長が「第7回世界ユネスコ会議」の議長の任にあたった。今日、教育の促進と文化の保護など多方面での活動を推進している。民間レベルでは1986年に59のクラブが設立され、北京市の教育委員会そして学校などが組織に加わり、「国連ユネスコの平和的で偉大な思想を宣伝する為に各国と交流」をテーマとしている。主な財源は政府から、後は寄付により運営している。

★**駐日大使館**・・・1972年9月29日に国交を結んで1973年に相互に大使館を設置。当初はホテル・ニューオータニ内に開設。1978年にここ元麻布に移動。その後「民をもって官を促す」という主旨で「友好交流部」を創設し、一層の交流をはかってきた。

★**記念撮影**・・・これからもユネスコ精神の下、一層の交流をお願いして記念撮影で会を締めくくりました。大変有意義な一日となりました。



◆**最後に**・・・春節の爆竹・花火の華々しさは日本には無い風物ですが、長い歴史の中で両国の旧暦のお祭りには一層の親しみを覚えました。述べ20億人民が移動する今日の春節では、インターネットやスマホで新年の挨拶を交わす若者も増えている、とのこと。情報化社会の先を行っている中国を隣国として交流し、よりよいアジア大陸となるようお互いに努力することが大切と感じた一日でした。私自身「謡曲」に興味を持ち、全210曲の内、中国に縁のある約20曲に慣れ親しんできました。鶴亀、狸々、石橋、菊慈童、そして邯鄲、楊貴妃などの曲が有名です。長寿の祝い、親孝行の話、泰平のめでたさ、歴史上の人物などがテーマです。この他、故事引用句を加えると、その曲数はかなりの数に上ります。この度の訪問を機に、一層の親交を思い馴染みの深い物語でこれからの千年の齢を寿ぎ、次の世代に伝えていきたいと思えます。

(小林敬幸 常任理事)

事務局便り

【ようこそ新入会員】個人会員：丹崎朋子さん、中村康子さん、中根利枝さん
学生会員：後藤大さん 外国籍会員：Zhuldyz Kapysh さん

【今後の事業予定】(詳細は別途、チラシ、ホームページ、ツイッター、港区報等でご案内します)

- ☆ 9月2日(月) 港ユネスコ協会会報 和文157号、英文156号発行
- ☆ 9月7日(土)～8日(日) 第75回日本ユネスコ運動全国大会 in 東京(於：豊島区立目白小他)
- ☆ 9月12日(木) 18:30～20:30 第2回国際理解講演会「ルーマニアの風土が育むクラシック音楽」
講師：嶋田和子氏(NPO法人日本ルーマニア音楽協会 理事長)
会場：港区立生涯学習センター305号室
- ☆ 9月26日(木) 18:00～20:00 茶の湯入門講座(3回コース)
10月28日(月) 講師：小野 宗恵(裏千家 専任講師)
11月25日(月) 会場：港区立生涯学習センター203号室
- ☆ 10月2日(水)～12月25日(水)【秋期】初級英会話講座、毎水曜、18:30～20:30、コース全12回
講師：マーク・マードック先生 会場：港区立麻布区民センター
- ☆ 10月2日(水)～12月11日(水)【秋期】中級英語講座、毎水曜日、18:30～20:30、コース全10回
講師：笠原三郎先生 会場：港区立生涯学習センター
- ☆ 10月5日(土) ユネスコスクール関東ブロック大会(於：玉川大学)
- ☆ 10月5日(土)～6日(日) 2019年度関東ブロック・ユネスコ活動研究会 in 埼玉(於：蓮田・白岡)
- ☆ 10月12日(土)～13日(日) みなと区民まつり(於：芝公園)
- ☆ 10月20日(日) ユース委員会 水辺事業(立案中)

【ご協力をお願い】

- ・日本ユネスコ協会連盟の東日本大震災子ども支援募金は、常時受け付け中です(MUA事務局まで)。

【編集後記】

- ・「汽笛一声新橋を はや我汽車は離れたり・・・」この歌詞は知っている。鉄道唱歌第1集1番である。知らなかったことがある。明治5年に日本初の鉄道が正式開業した際の新橋駅(初代)は別の場所にあったことを、現在の新橋駅(2代目)は嘗て烏森駅と呼ばれていたことを。現在の新橋駅から汐留方面への地下街を歩いていると、「旧新橋停車場」との掲示があり、それを辿ると「旧新橋停車場鉄道歴史展示室」が終着駅となる。ここで、新橋駅's(初代と2代目)の過去を知ることが出来る。(津野久志)
- ・国家間の協調体制を顧みると、貿易や金融など経済面からナショナリズムに引火して、民間の交流や政治的安全保障の対立への波及は、危険な兆候といえる。ポピュリズム的判断による、国際機関からの離脱や条約の破棄なども、大きく懸念される。(前田幹博)
- ・今年は今までにないほどの暑さだったように思う。特に湿気が辛かった。ハワイから来た友人は「日本は暑すぎるから早くハワイに帰りたい」と言っていたが、そのうちハワイに避暑に行く時代になったりして。(小林真弓)
- ・終戦記念日の前後には先の戦争に関係するTV番組が放映されるが、今年もいくつかを観た。新たに発見された史料を紹介したものの中で、2.26事件に関するものは、海軍がこのクーデター未遂事件の生起を直前の段階からずっと察知・偵察しており、最悪の事態にも備えていた事実を伝えるもので、歴史の真実を考えるうえで特に興味深かった。(棚橋征一)

港ユネスコ協会事務局 (火～金 10:30～17:00)

〒105-0004 東京都港区新橋3-16-3 TEL03(3434)2300 TEL・FAX03(3434)2233

Eメール：info@minatounesco.jp ウェブサイト：<http://minato-unesco.jp>